

当院でがん骨転移の治療を受けた方とご家族へ

当院では、がん骨転移がある患者さんに関する臨床研究を行っております。皆様には本研究の主旨をご理解いただき、ご協力くださいますようお願い申し上げます。

【研究課題】

骨転移がんサーボード介入症例についての診療データベースを用いた包括的研究および、その転帰と最終的な歩行状況に関する研究（11938）

【対象となる方】

2013年4月1日から2018年3月31日までに、東京大学医学部整形外科・脊椎外科またはリハビリテーション科において、がんの骨転移と診断された方。

【研究の目的】

この研究は、がんの骨転移と診断された患者さんの、骨折や麻痺などの生活の質を落とす重篤な合併症を予防することを目的としています。がんと診断される患者数は年々増加しておりますが、診療技術の進歩により生命予後は延長しています。長期に生存する患者さんが増加しており、骨転移と共存することが必要な方が増加しています。骨転移がある患者さんにとって、骨折や麻痺のリスクを評価しながら、いかに生活の質をおとさずに過ごすかが重要です。一方、これまで骨転移は臨床上あまり重要視されてこなかった経緯から、診断や治療の標準化が遅れており、骨転移患者さんの生活の質を客観的に評価する指標も確立していません。また、ひとくちに骨転移といっても、病気の種類や病変の部位によって様々です。よって、今後の骨転移診療の標準化と向上をはかるためにも、骨転移患者さんの情報を後向きに解析することは非常に重要です。しかし、当院での治療が終了した、もしくは当院への通院が困難となった際には、自宅近隣の病院への通院・転院などをお願いしている現状があり、約1/3の患者さんの経過が把握できておらず、十分な疫学研究ができておりません。そこで、当院での治療を終了した患者さんについて、その後の経過を書面で問い合わせをさせていただき、歩行の状況を把握したいと考えています。

【研究の方法】

この研究は、厚生労働省の「疫学研究に関する倫理指針」を守り、倫理委員会の承認のうえ実施されます。これまでの診療でカルテに記録されている血液検査や画像検査、手術記録、病理検査、理学所見、リハ記録、放射線治療録、アンケート調査などのデータを収集して行う研究です。特に患者さんに新たにご負担いただくことはありません。また研究の対象となる患者さんへの謝金はありません。なお、当院での治療を終了した患者さんにつきましては、歩行状況等につき郵送でアンケート調査をさせていただくことがございます。診療録の解析は当院で骨転移と診断された全患者さんを対象としますが、アンケート調査は、当院での治療を終了した患者さんについてのみ行います。現在の状況、トイレ歩行の状況を問うアンケートです。

この研究のためにご自分のデータを使用してほしい場合は主治医にお伝えいただくか、下記までご連絡ください。ご連絡をいただかなかった場合、ご了承いただいたものとさせていただきます。

研究結果は、個人が特定出来ない形式で学会等で発表されます。収集したデータは厳重な管理のもと、研究終了後5年間保存されます。なお研究データを統計データとしてまとめたものについてはお問い合わせがあれば開示します。下記までご連絡ください。ご不明な点がございましたら主治医または下記へお尋ねください。

平成30年3月

【問い合わせの連絡先】

研究統括医師

東京大学医学部附属病院リハビリテーション科 篠田裕介

住所：東京都文京区本郷7-3-1

電話：03-3815-5411（内線35180）FAX：03-5684-2094

Eメールでのお問い合わせ：・・・・・yshinoda-tky@umin.ac.jp